

紹介記事

松本市の「まちづくり」について

(一財)和歌山社会経済研究所 主任研究員 中平 匡俊

和歌山県庁 主査 永尾 吉賞

和歌山商工会議所 主任 中浴 正隆

「まち」は行政主導だけで描ききれません。描かれた「まち」に住民がどのように関わり、どのように活用できるかが最も重要であり、それこそが「まちづくり」の本質です。今回、私たちは長野県松本市の「まちづくり」を「交通」「景観」「商業」の3つのテーマに分類し、「まちづくり」の基本的な考え方と取組みについてまとめ、その重要性を再確認しました。

はじめに

松本市は、明治の大火で建物の大半を焼失しています。しかし、松本城（国宝）はその時難を逃れ、幸い昭和の戦災による市街地の焼失もなかったそうです。結果、現存する城を中心とした城下町としての江戸期の町割りが残り、『建物』は明治後期から大正・昭和戦前のものが多く残る、何とも面白く風情ある「まち」を形成しています。

松本城や日本アルプス連峰を見渡せる景観を大事にし、建物の高さ制限にも力を入れてきた経緯も功を奏し、魅力ある路面店が並び、特にまちなかは、歩いて心地よい空間形成となっています。

年間90万人の天守閣への入場者数を誇る松本城を中心に、「まちなか」そのものが滞留拠点のような印象を受けます。視察したのは平日にもかかわらず、「まちなか観光」を歩いて楽しむ人々が数多く見受けられました。



【松本城と日本アルプスを望む】

1 交通まちづくり

松本市は、交通の結節点として県内外を結ぶ広域交通ネットワークの充実も図りながら、公共交通の利用を促進する「交通まちづくり」を掲げています。次世代型交通システムの検討も視野にヨーロッパ型の交通まちづくり研究を昨年度から始めています。視察結果を踏まえた市民報告会なども活発に実施されており、「交通まちづくり」への市民の関心度合いの高さが伺えます。

松本市の「交通まちづくり」の基本目標は「人と環境にやさしい松本のまち、みち、くらしづくり」に軸足を置き、都市の将来ビジョン「健康寿命延伸都市・松本」に連結して

います。

近年、超少子高齢化型人口減少社会への対応や地球温暖化の防止などが重要な課題となっている社会状況下、市町村合併に伴う市域の拡大を踏まえ、社会情勢変化への対応かつ集約型都市構想への転換などに向け、新しく「松本市総合都市交通計画」(平成23年3月)を策定、概ね20年後(目標:2030年)を目指した長期的・総合的な交通・施策についてとりまとめられています。



【交通政策の一つとして、松本市内中心部を周遊する循環バス「タウンスニーカー」】

2 景観まちづくり

松本市は、昭和63年5月に国から「都市景観形成モデル都市」の指定を受け、平成元年3月に「松本市都市景観形成基本計画」を策定、平成4年4月に「松本市都市景観条例」を施行、松本城周辺では高度地区指定(平成13年3月)をし、松本城本丸及び二の丸(外堀)内から北アルプス及び美ヶ原高原を中心とした東山の優れた景観の保護、天守閣の存在感保持、城周辺の住環境の保全を図っています。

きめ細かい区域毎の高さ制限に加え、建物外壁や屋根の色彩を制限する基準を設けており、平城(ひらじろ)の松本城を最大限活かそうという工夫が地域の人々に浸透していることが伺えます。「パートナーシップを持って松本の景観を守り育てていこう」ということが景観まちづくりの基本理念となっています。



【市役所外観】

市役所建物の高さが景観条例に抵触しており、建て替えの際は、低くしなければならない。

日本の地方都市に押し寄せる均質化の波、「チェーン店のまち」と形容されるようなことも似かよったまちになってしまう流れに何とか歯止めをかけたいという思いで、3年前に「松本都市デザイン学習会」という取組みが立ちあがりました。

「松本都市デザイン学習会」は現在2つのタイプの活動が行われており、1つは講師を招いての講座で、年間を通じ月1回ほどのペースで行っているそうです。

2つめは、再開発に対するコンセプト提案であり、「都市デザイン」というと表面的な捉え方だけであるようにイメージされがちですが、それだけではなく既述のように「松本ならではの都市づくり」が重要テーマであり「都市政策」といってもよいでしょう。

具体的には中心市街地に存在する片倉工業の再開発に対する提案が、現在進行中の最大課題だと聞きました。当該用地は約8.3haの広大な敷地で、松本の近代化や日本の製糸業の隆盛に重要な役割を果たしてきた歴史的な文脈をもつ場所だそうです。

この場所へのイオンモール進出の話が進んでおり、正式な計画発表の前に何とか思いを伝えるべく、ワークショップなどを重ね「松本都市デザイン学習会」としてまとめた開発コンセプトを松本市に提案したそうです。短期的経済性、機能性、利便性だけを優先した価値観での再開発では、「松本」が壊れてしまうという強い危機感を持つての活動です。

松本市は、これを受けて、また商工会議所や議会からの意見もあり開発計画発表前に、松本市としてのまちづくりの考えを示す必要があると考え、開発に際しつぎの3つの重要点を求めています。それは「松本らしい開発」・「適正規模の開発（既存施設との共存共栄）」・「回遊性のある開発（完結型、囲い込みはだめ）」です。

3 商業まちづくり

コンパクトシティの考え方を優先するまちづくりの推進がなされています。周辺地域との合併により市域は拡大してきた経緯があるなか、基本的には市街化調整区域の線引きをはずさない、すなわち市街化を拡散させる政策はとってこなかったということです。とはいえ市街化調整区域においても居住環境を充実させエリアの活性化につながるよう、一定規模の開発は許可する開発条例を制定、その課題に対応してきています。

中心市街地については、様々な機能が集約され利便性が高く、また文化を楽しめるエリアを目指しています。したがって「商業」についても重要な機能の一つに位置づけられています。松本城を中心とした歴史・文化を大切に、歩いて楽しめるまちづくりという住民（商店主）意識ともあいまって、古くからの商店街を存続させ街なみ景観としても活かしていこうという考え方が中心にあります。

以下に、視察した2つの商店街を紹介します。

ナワテ通り商店街

開市からスタートした商店街、市道であったところに勝手に店（露店）を出していたのが始まりです。

見苦しいとの意見も一部にありましたが、多くの市民から残してほしいとの意見で商店街として残った歴史があります。



【ナワテ通り商店街】

平成 13 年に全面改装され昔の町並みを再現しています。下町風情あふれる庶民的な商店街となっており、「かえる」が商店街のシンボルです。

店舗数は、37 店舗ですが生鮮 3 品はなく、「観光通り」の色彩が強くなっており、平日のお客さんが少ないのが悩みと聞きました。

イベントとして定着している一つが「かえる祭」です。運営メンバーは店主、信州大学、松本大学のボランティア 100 名程度で、企画・立案段階から学生が参加します。学生達もナワテ通りを愛しており、学園祭等と同じような感覚でたいへん熱心に取り組めます。来場者数は 1 日 7,000 人～8,000 人で年々増加しています。「かえる」のコアなファンも全国から集まってくるそうです。かえるグッズだけ売る店もあります。

中町商店街

中町通りは西から東へ抜ける善光寺街道（北国街道西街道）沿いにあり、昔は商店街に蒲団屋、毛糸屋、金物屋、家具屋が多くあった通りです。



【蔵の会館】



【商店街内の道路】

店舗は住居一体型で住んでいる人が多くある商店街です。店舗数は約 90 店舗（現在、5～6 店舗の空店舗が存在）です。

明治時代の蔵が 20～30 残っていた街であり、「蔵のある街づくり」を商店街のコンセプトとして、各個店が可能な限り、イメージを統一すべく取組みを行っています。この共通

認識が根本にある限り、街は間違った方向に行かないという住民意識が存在しているようです。シンボリックな場所として誕生したのが「蔵の会館（愛称：蔵シック館）」であり、展示会・講習会・会議などに活用されています。商店街には地元の小学校4年生から6年生が校外学習として訪れます。

商店街内の道路はあえて意識的に蛇行させています。（全部、石畳にしようとする管理費用と整備でたいへんであるためしなかったそうです。）

以上

【後記】

本稿は、「松本市のまちづくり」について平成24年11月19日と20日の2日間にわたり関係者の皆様からの聞き取りと視察の機会を得、それに基づいて「交通」「景観」「商業」のテーマ毎に要点整理したものです。人と環境に配慮したまちづくりの理念がどのテーマにおいても見事に貫かれていると思います。貴重なお話とお時間を頂戴しました関係者の皆様に改めて御礼申し上げます。